

聖書：マルコの福音書 16：1～8

説教題：驚愕の福音

日時：2024年3月31日（朝拝）

マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの4つの福音書は、いずれも「週の初めの日」という言葉をもってイエス様が復活された日の出来事について語っています。しかしイースター礼拝の日の説教箇所としてマルコの福音書は少し取り上げにくいかと思いません。なぜかと言えば、マルコの福音書には復活したイエス様が出て来ません。従ってイエス様が弟子たちと会った記事もありません。その再会による喜び、祝福、勝利といった要素も他の福音書に比べると欠落しています。このマルコの最終章で問題になるのはいわゆる追加文です。8節以降に短い追加文と長い追加文が「」付きで載っています。今日これらの追加文はマルコが書いたものではないという見方で学者たちの間に一致があります。まず初期の重要な写本に、これらの追加文はないという外的証拠があげられます。またここで使われている文体、用語等もマルコの福音書のものと大きく異なるという内的証拠の観点からも、これらがマルコの手によるものでないことははっきりしています。ではなぜこれらが付け加えられたかと言えば、8節でこの福音書が終わりだとするとあまりに唐突であり、不自然であると多くの人々に感じられたからでしょう。グッドニュースを告げる福音書の最後が「恐ろしかったである」という言葉で閉じられるとは到底信じられない。この続きがあったはずである！そこで何とかその部分を補おうと努力した結果が、これらの追加文なのでしょう。一方、マルコの福音書は16章8節をもって完結したとしても少しもおかしくないし、むしろそこにマルコ独特のメッセージと意図があると見る人たちも多くなります。この議論にここで深入りすることはできませんが、私たちは与えられているこの箇所に注目してマルコが伝えようとしているメッセージを探って行きたいと思います。

さて安息日が明けた週の初めの日、マグダラのマリアとヤコブの母マリアとサロメは、イエス様に油を塗りに行こうと思い、香料を買いました。ユダヤでは一日は日没から始まり、日没で終わります。ですから1節の安息日が終わった時とは今日で言えば土曜日の夜になります。安息日が終わり、一斉に店が開く時だったのでしょう。彼女たちは香料を買いました。この彼女たちは15章40節にも出て来て、そこではイエス様の十字架の死を遠くから目撃したことが述べられています。また15章47節にはその内の二人の名が出て来て、彼女たちはイエス様の葬りも目撃したことが述べられ

ています。イエス様は確かに死に、また葬られました。彼女たちははっきりそれを見届けました。彼女たちが買った香料は死体の腐敗を防ぐためのものではなく、腐敗の臭いを和らげるためのものでした。イエス様の死は現実のものです。イエス様を再び取り戻すことはできません。しかしイエス様への敬慕の思いから、いくらかでもその亡骸が尊厳を保てるようにと、彼女たちはこの日の早朝、墓へ出かけたのです。

3 節で彼女たちは「だれが墓の入り口から石を転がしてくれるでしょうか」と話し合っていました。これは弟子たちが隠れていたこととも関係したのでしょうか。一緒に墓に行ってくれる人がいません。男の人がいなくて、どうやって石を転がすことができるのか。その答えがない状態でも、とにかくイエス様への愛情ゆえに彼女たちは出かけて行きます。誰かが、どのようにしてか、開けてくれるのではないかという希望を持ちながら。すると4 節に「その石が転がしてあるのが見えた」とあります。その石は非常に大きいものでした。原文でここは受身形で記されていて、転がしたのは神であることが暗示されています。何のために神はこのことをなさったのでしょうか。それはイエス様が墓から出るためではありません。復活後のイエス様は閉め切った弟子たちの部屋にいつの間にか立っておられたように、あるいはエマオに向かう二人の弟子の前から突然見えなくなったように、以前の状態と異なる面があったようです。ですからイエス様は墓の入口が開けられることなしに、すでにここから出ていたと思われる。とすると神が石を転がしたのは女たちに墓の中を見せるためだったと思われる。

墓の中に入ると真っ白な衣をまとった青年が右側に座っていました。これは天使です。女たちは非常に驚きました。御使いはこの日のメッセージを伝えます。6 節：「驚くことはありません。あなたがたは、十字架につけられたナザレ人イエスを捜しているのでしょうか。あの方はよみがえられました。ここにはおられません。ご覧なさい。ここがあの方の納められていた場所です。」彼はまず、驚くことはないと言います。そして彼女たちが良く知っているナザレ人イエス、しかも十字架につけられたことをあなたがたが見たあのイエスを捜しているのでしょうかと言います。そしてあの方はよみがえられました！と言います。このよみがえったと訳されている言葉も原文では受身形で書かれています。つまりイエス様は父なる神によってよみがえらされたのです。神はここにどんなメッセージを語っておられるのでしょうか。イエス様の死はご自分の罪のための死ではなく、私たちの罪のための死でした。聖い神の御子が私たちの罪

をその身に背負って死んでくださいました。神の御子なる方であるとは言え、多くの人々の罪を全部一人で引き受けて、その身代わりを果たすとは一体どれほどの犠牲を払うことでしょうか。皆目見当もつかないようなことです。イエス様にとってもそれは恐るべきものだったので、イエス様はゲッセマネの園で汗を血のしずくのように滴り落とし、身もだえしながら祈りの格闘をされました。そして十字架上では「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」と叫ばれました。イエス様はその十字架の死を通して、ご自身により頼むすべての人の罪を担い、その代償を完全に支払われました。そのわざが成功したしるしとして、その証として、その結果として、父なる神がイエス様を死からよみがえらせたのです。このことはイエス様により頼む者たちに直ちに素晴らしいメッセージをもたらすこととなります。それはイエス様により頼む者たちの罪は今やイエス様において完全に解決された！清算済みとなった！ということです。ですからイエス様の復活はイエス様を信じる者たちの罪が神の前で赦されていることを示す神の公的宣言でもあります。ローマ書4章25節：「主イエスは、私たちの背きの罪のゆえに死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられました。」

御使いは、イエス様は「ここにはおられません」と言います。ですから今日の私たちもイエス様を墓の中に求めてはなりません。過去の方としてではなく、今も生きている方として求めるべきです。今日も生きておられる方に出会い、その方とつながる祝福に生きるべきなのです。

続いて御使いは7節の使命を彼女たちに与えます。「さあ行って、弟子たちとペテロに伝えなさい。『イエスは、あなたがたより先にガリラヤへ行かれます。前に言われたとおり、そこでお会いできます』と。」ここにイースターの福音は赦しの福音であり、交わりの回復の福音であることが示されています。この時の弟子たちはイエス様を見捨てて、もはやイエス様の前に出ることなどできない状態にありました。彼らはたとえ一緒に死ななければならぬとしても、あなたを知らないなどとは決して申しません！と誓ったにもかかわらず、イエス様が敵に逮捕されると我先にと蜘蛛の子を散らすように逃げてしまいました。しかしそんな彼らがガリラヤでイエス様に会えると言われます。これはイエス様が前に約束しておられたことでした。14章27～28節でイエス様は弟子たちがつまずき、イエス様を見捨てて逃げて行くことを語られた後、よみがえってわたしはあなたがたより先にガリラヤへ行くと言っておられました。

その約束通り、ガリラヤでお会いできると御使いは告げます。これは弟子たちが罪を赦されて、もう一度イエス様の前に出ることができること、またただ赦されるばかりでなく、もう一度イエス様の弟子として立たせていただけることを意味します。ガリラヤとは彼らがイエス様と出会い、イエス様の弟子として召され、イエス様とともに歩んだ場所です。そこで彼らは再出発させていただけるのです。特にペテロが名指しされているのは彼が最もひどい倒れ方をしたからでしょう。彼はイエス様を3回も否認しました。彼は自分の本当の姿を知って愕然とし、外へ出て行って激しく泣きました。その彼も赦される。その彼ももう一度立たせていただき、主の弟子として歩ませさせていただけるのです。

さて、これを聞いた女たちはどう応答したでしょうか。そのことが8節に記されています。「彼女たちは墓を出て、そこから逃げ去った。震え上がり、気も動転していたからである。そしてだれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである。」確かにこれがこの福音書の最後の言葉であるとする、あまりに唐突であるように思います。しかし先に触れましたように、これがマルコの最後の言葉であってもおかしくないし、むしろ彼の大切なメッセージがここにあると見る人たちも多くいます。ここから最後に3つのことを考えて終わりとしたいと思います。

まず一つ目ですが、この8節では女たちが震え上がり、気も動転し、恐ろしかったということが強調されています。しかし実はこれはマルコがこの福音書全体に渡って強調していることです。神のみわざに接した人の姿として彼は何度も人々のこのような反応を記して来ました。その代表的な箇所をアウトラインを記した紙にメモしました。最初のいくつかだけを確認しますと、まず1章27節では汚れた霊につかれた人からその霊が追い出された時、「人々はみな驚いて、互いに論じ合った」とあります。また2章12節で中風の人を癒やした時、それを見た「皆は驚き、『こんなことは、いまだかつて見たことがない』と言って神をあがめた」とあります。また4章41節では海を静めるイエス様の圧倒的な力に直面した弟子たちの反応としてこう記されています。「彼らは非常に恐れて、互いに言った。『風や湖までが言うことを聞くとは、いったいこの方はどなたなのだろうか。』」また5章15節では、多くの悪霊につかわれていた人、すなわちレギオンを宿した人がイエス様によって正気に返って座っているのを見て、人々は「恐ろしくなった」とあります。同じ5章42節では、死んだ少女を生き返らせたイエス様のみわざに接して、「それを見るや、人々は口もきけないほど

に驚いた」とあります。このようであるとしたら、復活のニュースに接した女たちがまず震え上がり、気も動転し、恐ろしくて誰にも何も言えない状態になったのは自然なことではないでしょうか。そしてこれはこれまでマルコが書いて来たことに照らして考えるなら、ふさわしいクライマックスと言えるのではないのでしょうか。これは裏を返せば、それほどに神の福音は私たちの理解をはるかに超える素晴らしいものであることを強調するものです。私たちが将来復活の恵みにあずかった時、どうなるでしょう。今は復活の教えを頭で分かっているつもりかもしれませんが、実際にその日になって先に天に送った私たちの愛する方々を目の前にし、顔と顔を合わせて再会する日を迎えたら、気が動転し、ガクガクブルブルし、受け止めるのに時間がかかり、息が止まって何もできない状態になるということはないのでしょうか。神がもたらしてくださった福音はそのようなものであるということです。16章8節に示されているように驚愕の福音です。私たちのこれまでの経験をはるかに超える救いの世界に神は私たちを招き入れてくださるのです。

二つ目にこの16章8節は神の恵みを浮き彫りにする効果を持っています。ここでは人間の弱さや不十分さ、足りなさが描かれています。弟子たちに伝えよと言われたのに逃げ出し、震え上がって、黙っていた彼女たちの姿が描かれています。しかしこの福音書を最初に読んだ読者たちは知っています。話はこれで終わりでない。確かに彼女たちは当初は黙っていたが後には伝える者とされた。そして今や自分たちのところにも神の福音は伝えられている。こうして人間の弱さによって制限されることなく、むしろそれに打ち勝ち、それを乗り越える神の恵みと力が力強く証しされることになっているということです。人間は絶えず失敗します。弟子たちはイエス様を見捨てて逃げた状態にありました。女たちも震え上がって、すぐには正しく従えていません。男女関係なく、みな不十分です。イエス様がこの福音書の14章38節で「霊は燃えていても肉は弱いのです」と言われた通り、肉の弱さが絶えず付きまとっています。16章8節が示す弱さを私たちもいつも示しています。にもかかわらず神の福音は今日も立っています。私たちはいつも弱く、私たちを見るだけなら希望はありませんが、神はそんな私たちに打ち勝ってみわざを進めてくださるのです。その神に望みを置き、神に従う者であるように！というメッセージを、この16章8節は私たちに語るものになっているということです。

そして三つ目はもしこの16章8節がマルコが書いた最後の言葉とするなら、多く

の人々がまだ終わっていないと感じる通り、まさに神の福音の物語はまだ終わっていないというメッセージをマルコはここに込めていたのではないかと思います。この福音書の冒頭1章1節に、この書のタイトルとして「神の子、イエス・キリストの福音のはじめ」とありました。これはこの福音書の最後の部分までを含めて、この書全体が「イエス・キリストの福音のはじめ」であるということです。とすると今日私たちが読んでいる部分も、まだはじめの部分でしかないということになります。ということは、この続きが必要であることになります。それは誰が書くのでしょうか。それはこの書を読んだ私たち一人一人が、この福音に生きることによって書いて行くということなのではないでしょうか。ですから私たちはこの女たちがこの後どうしたのか、また弟子たちはどうしたのかという関心だけでこの書を閉じてはならないのです。マルコはイエス・キリストの福音のはじめをこのように書きましたが、この後を書いて行くのは私たちです。私たちは、このマルコの終わりでも強調されているように弱い者たちですが、そんな者たちを用いてみわざを進められる恵みの神に信頼して、私たちがその続きを書いて行く者であるようにとマルコは意図していたと考えられるのではないのでしょうか。

このイースターの日、神は恐るべきことをなさいました。神はイエス様をよみがえらせ、死で終わらない世界を私たちの前に開いてくださいました。その知らせに接した人間はすぐには受け止められず、震え上がることしかできないほどでした。私たちはマルコが語るこの驚愕の福音に耳を傾けて、益々この福音に驚き、恐れ、その素晴らしさを知る者たちとさせられたいと思います。そして私たちの言葉と生活をもってマルコの福音書に続いてイエス・キリストの福音全体が記される神の書物の1ページ、あるいはその1行を占めさせていただく者たちとなり、この福音がさらに伝えられ、その御国が完成することのために仕え、用いられる特権と幸いに生きる者たちとさせられて行きたいと思います。